のやうに美事に出來ましたのも皆神助によるものだといふ感が殊に深く致します、私達は後鳥羽天皇の菊御作の立派さに打たれ、これに相應しきこしらへをとて苦心に苦心を重ねました、たとへば漆にしましても由緒正しきものをとて探しましてはからず赤城山の麓の敷島村といふところの舊家に未だ一度も漆をかいたことのない大きな樹があると傳へ聞いて漆師が出かけてその主人に御太刀の話をして漆をもらつて參り、漆師の老人が生れてからこんなよい漆を見たことがないと感じたほどの漆を手に入れることができたやうな次第です、また鹿皮の紫紺染にしましても尋常ならどうしても二年を要するものですが、南部の注文先に命じて早く染め上げるやうにしました、ところが途中で十枚の鹿皮を三回染め上げたのにまだ色が出ずとてもできないと悲痛の電報が來て道明氏が驚いて南部に驅けつけて勵ましどうしてもといふことになつたのですがあまり何度も染め上げるためもう染草がなくなるといふわけで、それではと十枚の皮を四枚に減らしてそれを百四十回染め上げてやつと思ふ色ができたのでした、また黄金の菊御紋章にしても鞘が細まるにしたがつて小さくし、しかもそれが小さく見えず卵なりの鞘の上の菊花がどこから見てもまんまるに見えるやうにとの苦心などは誠に名匠の祕術を傾けたもので實に美事に出來上りまして私もほつと胸を撫で下した次第です

（昭和三年八月十六日『東京朝日新聞』）

御大礼に際して本校工芸部は、この外に東京市その他から皇室への献上品の製作（「年報」の依嘱製作の項参照）も依頼され、教官たちは忙殺された。

⑧ 新たに校旗を作る

昭和三年十二月、本校の新しい校旗が作られた。製作の経緯は次の記事に明らかである。

新に校旗を作るの記

昭和三年十二月十五日を以て東京及近縣の學生及青年團を御親閲あるべき旨仰出され本校も亦其班に列することに決するや先づ鈴川教務の心に繫りしは校旗の事なりき、御親閲に際しては其校の表示たるべき校旗の必要なることは言を待たざるがゆへなり、因りて鈴川教務は文庫に就きて之を索む、則ち明治二十三年憲法發布當時に作られし校旗にして其後絶て之を使用するの機會なくして文庫内に收藏され居るものなるが現在の文庫職員も嘗て之を見たることもなき程にて再三搜査して漸くに見出したれども扨之を檢するに其形は巾約二尺長八尺に渉り旗足二つに裂かれ表は紅色紙子裏に白繻子にて表裏共に東京美術學校の六字を小篆にて黑く縫ひ附け萠黄地小葵文の裂地にて緣を廻したる極めて堂々たるものにはあれど如何にせん當時我校の制服たりし闕掖冠帽の姿に相應して作られたるものにて現時の洋裝に適せざるのみならず街頭には架線多く行人肩磨の現代に押立行くには過重過大殊に分列行進等には全く不適當なることを知り校長、鈴川教務の具甲により其實際を檢して玆に更めて校旗を作ることを命じ實行委員として鈴川教務和田工藝部教務及渡邊啓三を指命す　之れ實に十二月

七日にして御親閲當日まで僅に八日を餘すのみ。

旗は大體に於て由來ある舊校旗の姿を捨てず只現時の制服と捧持行進に適するの大さとなすことにて裂地は學校に藏されし模古名物裂を使用することゝなれり　何分大早急を要することゆへ即日此裂地の尺量を基として雛形を作り捧持に適する大さを協議測定し且つ全體に渉る圖稿を作り翌日校長の決裁を經たり　爾後六日分擔を定め最大速度を以て進渉することゝし渡邊は洋服師に白羅紗を索め刺繍師に手詰の談判を行ひ裁縫師に膝詰の交渉を遂げ總紐の製作を無理押に注文する一方には和田氏は關野聖雲氏に當りて竿頭目標の美の字の彫刻を迫り鈴川氏は臺麓の古武具店に柄と爲すべく六尺の手鎗を索め購ひ來りて直に之を六角紫水氏に囑し塗り改む　又清水龜藏氏は八田〔辰之助〕研究生を督して金物全部を作る等三方四方皆大緊張を以て支障なく進み十四日午後約を違えず集り來りし諸式を八田研究生を助手として取纏めを了りしは室内やゝ暗き午後五時なりき　鈴川氏と共に玆は安堵の胸を撫下したるが鈴川氏は其夜此新旗に神酒を供へ燈火を掲けて清秡の意を致し翌日の御親閲を待ちたる次第なりき。

扨出來の新校旗は挿繪に現はれたる如く大さは巾一尺九寸五分竪四尺一寸五分柄の長五尺九寸なり、表の裂地は銀地唐花文早雲寺錦に緣廻りは茶地向鳳凰圓文錦「二人靜」なり　共に龍村平藏氏の模古織成の名物裂にて裏は之を入れ換へとなす　東京美術學校の六字は本校創設に際して時の教授黑川眞賴博士が揮毫されし大師樣の大門標の文字にて現に文庫に收藏さるゝ深き因緣あるものにて（現今の陶製門標の文字は則寫眞縮少によるものにて文字の大さ適當なれば之を拓本に取りて轉寫しやゝ布〔字〕を改めたるなり）表は黑羅紗裏は白羅紗共に撚糸を以て緣取り千鳥懸となす金具は横上兩端の鍍金金具は美字と唐花文を彫刻し其他けら首、逆輪、紐付鈌、石突等皆素銅なり　柄はうるみ塗千段は青貝叩なり（青貝叩は遂に間に合はず後より作ることとなれり）　目標美の字は金箔押し三方正面紐は古袋紫型四つ打本切房總角結なり舊校旗は勿論由來深きものとして丁寧に保存さるべく新校旗は此度の御親閲に最初の光榮を荷ひ爾後機會ある毎に本校の標象として光輝を加へ行くことゝなれり

昭和四年一月八日　〔渡辺〕啓三識

（『東京美術学校校友会月報』第二十七巻第七号）

⑨ 六角紫水の楽浪漆器研究

関野貞の朝鮮半島古蹟調査と小場恒吉の模写については本書第二巻535頁に記したが、関野の発掘品中、注目すべきものに楽浪漆器がある。大正五年の調査の際、楽浪郡（大同江一帯の地方）の古墳から発掘されたもので、小場恒吉や大村西崖は早くからこれに注目し、高く評価していた。大正十二年に至り、六角紫水は京城へ行って実物を見、その技術に感嘆して技法復興のための研究を始めた。翌十三年秋にはさらに楽浪漆器の発掘があり、前回発掘の分も含めて年代もはっきりしたので、学者の間で強い関心が持たれるようになった。その間の経緯は小場恒吉著「朝鮮楽浪漆器談」（『東京美術学校校友会月報』第二十四巻第二号）、六角紫水著「楽浪発掘漆器に関する講話」（同誌第二十五巻第三、第五号）に詳しく記されている。